

第13回国際さい帯血シンポジウム参加報告

今年13年目を迎えた国際さい帯血シンポジウム(International Cord Blood Symposium)が6月11-13日、米国サンフランシスコで開かれた。

このシンポジウムは現在AABB(米国血液バンク協会)が主催している。今年もさい帯血移植に係る米国を中心とした医師や看護師、公的・私的さい帯血バンクの関係者、医療機器や製薬会社、またヨーロッパ、アジア、中南米からの出席者約250名が参加した。

今年のシンポジウムでは(1)公的とファミリーさい帯血バンクの連携 (2)アジアのさい帯血バンク活動(3)さい帯血の品質向上(4)さい帯血幹細胞の試験管内増幅と生着率の向上(5)さい帯血バンクのプロセス自動化とデータ保存技術 (6)さい帯血移植、骨髄移植、ハプロ移植成績の比較(7)世界のさい帯血移植成績の解析 (8)さい帯血、胎盤・さい帯組織の再生医療への展開 (9)さい帯血を用いた免疫療法 (10)さい帯血を用いた再生医療の臨床報告 (11)さい帯血バンクの将来について多様な角度からの最新の成果が報告され、熱心に討議された。

特に、米国デューク大学のカルツバーグ教授らによる小児脳性麻痺への自己さい帯血投与の臨床試験に関する中間報告が注目された。全体120症例中の63症例(3歳以下:45名、3~6歳:18名)についての中間報告である。脳性まひ児の粗大運動能力尺度(GMFM; Gross Motor Function Measure)スコアは投与半年後から1年にかけて良好となる傾向がみられた。精査によると、投与細胞数が多い場合(総有核細胞数 $1.96 \times 10^7/\text{kg}$ 以上)には明らかな有意差が得られることがわかった。会場の出席者の反応としては、効果がありそうだとの見方が大勢であり、今後の解析と正式発表が待ち望まれることとなった。

また、さい帯血移植・バンキング・再生医療に取り組む新たな枠組みであるCord Blood Associationが設立されたことが報告され、参加者の多くの賛同を得た。ここでは、公的およびファミリーさい帯血バンクが連携してさい帯血移植や再生医療への進展に協力していくこととなる。

今回のシンポジウムから、さい帯血を用いた白血病治療は確実な歩みを続けており、さらにさい帯血の様々な細胞を用いた炎症・再生医療が臨床の場で進展してきていることを強く実感することとなった。

(技術顧問 高橋恒夫 記)